

2025.3.10

国際健康福祉実習(インドネシア)

1. プログラム全体を通した感想

日本とは国民性や気候などすべてが異なる環境の中で、さまざまなハプニングもあったが、それを含めてもとにかく充実した日々だった。

プログラムが進むにつれ、チーム内では様々な葛藤や対立も生まれた。しかし、それはそれぞれが本気で取り組んでいたからこそ起ったことだと考える。日に日に、お互いの考え方や意見を共有する機会が増え、それに伴いミーティングの質も向上した。最初はチームとしてもぎこちなかつたが、メンバーそれぞれの個性を互いに尊重しあいうまく機能できるようになつたと感じる。

私自身、体調不良や怪我が重なり、満足に活動できる時間が限られた部分もあった。なかなかコンディションが整わず、みんなと同じように活動に参加できないことに悔しさを感じる場面もあった。しかし、それも一つの経験として受け止め、今の自分にできることは何かを考えながら前向きに行動につなげることができたと思う。

～Blimbingsari での経験～

・環境の違い

村では英語もほとんど伝わらず、言語が通じなかつた。そのため、自分の伝えたいことをそのまま表現できないもどかしさを感じた。

また、日本では当たり前のことが当たり前ではないことにも気づかされた。例えば、冷水のみのシャワーやドライヤーが使えないなど。日本では日常的に湯船に浸かり、ドライヤーを使うなど、水や電気を豊富に使っている。しかし、それが決して当たり前ではないと実感した。この経験を通じて、私たちが普段、何不自由なく資源を豊富に使っていることを当たり前だと思わずに、日頃からもっと大切にしなければならないと強く感じた。

・施設の子どもたち

日本の児童養護施設は、主に虐待など家庭の事情によって子どもたちが入所するイメージ

がある。しかし、インドネシアでは事情が異なり、両親がいるにもかかわらず、生活費が足りずに施設に預けられる子どもや、一夫多妻制の影響により、そもそも両親が婚姻届を提出しておらず、戸籍さえも提出されていない子どもがいることを知った。

このような子どもたちの背景を知り、次のような貧困のループについて考えさせられた。

親が仕事を得られない→生活費を稼げない→子どもを養う余裕がない→学校に通えない→学がないためいい良い仕事に就けない

この負のループはどうすれば断ち切ることが出来るのだろうか。

施設の衛生環境は、お世辞にも綺麗とは言えず、子どもたちの頭にはたくさんのシラミがついていたり、ゴミや鉢の破片が散らばる中を裸足で歩いている子どももいた。日本との文化の違いもあるが、こうした環境で過ごすことは、子どもたちにとって決して良いことではないと感じた。しかし、インドネシアの文化や施設の経営状況を踏まえると、すぐに改善するのは難しく、日本人である私たちの価値観を一方的に押し付けてしまうのではないかと悩む部分もあった。それでも、最後の Evaluation では各々が今の状況でも取り組めることから、少しずつ改善し、施設がより良いものになってほしいと自然に考え、多くの意見を出すことができた。

施設の子どもたちと近くで過ごす中で、言葉が通じなくても、一緒に遊んだり、掃除をしたりするうちにどんどん距離が縮まるのを感じた。子どもたちは日本から来た私たちにとても興味を示し、折り紙と一緒に作ったり、「日本語で自分の名前を書いてほしい」と頼んできたりした。その純粋な眼差しに心が洗われるような気持ちになった。

2. 初回参加時の目標と達成度

私が今回このプログラムに参加した動機は、「海外に行ってみたい」という単なる興味や憧れだった。特にインドネシアについてはほとんど知らず、ただ「発展途上国」という漠然としたイメージしか持っていないかった。そのため、環境や衛生面に対して少し不安があり、自分一人では決して訪れない場所だろうと思っていた。

しかし、このプログラムに参加し、初めて海外を訪れたことで、自分の世界が大きく広がったと感じた。発展途上国というイメージだけで不安を抱いていたインドネシアだったが、実際訪れてみると、関わった人々はとても優しく、街には日本にはない活気が溢れていた。また、宗教や文化の違いに触れる中で、今まで全く知らなかつた新たな発見や知識を得ることができ、「こういう世界もあるのだ」と気づかされる貴重な経験となった。

今回の経験を通じて、私は勝手な思い込みによって自分の世界を狭めてしまっていたことに気づき、反省した。

3. 今回どのような点が不十分だったか、今後どのようにそれを実現するか

・生活リズムの違い

インドネシアの気候の影響もあり、プログラム中は朝早く活動を開始し、日中に休憩を取った後、午後から再び活動する生活リズムだった。そのため私は、日本とは異なるこのリズムに慣れず、体調を崩してしまった。今後は、現地の生活リズムに早く順応できるよう、事前に対策し、適応力を高めたい。

・言語の壁

言語が異なるため、コミュニケーションをとるのが難しかった。相手の国に対するリスペクトを示すためにも、訪問前にもう少しインドネシア語を勉強しておくべきだった。今後は、もう少し相手の国や言語について事前に学習しておき、積極的にコミュニケーションをとれるようにしたい。

・周囲の人たちとの関わり

プログラム前半は、チーム内のことや自分自身のことで精一杯になり、全員に余裕がなかった。その結果、施設の子どもたちやホームステイ先の家族と十分に関わることが出来なかつた。プログラム後半になり、時間が限られてきた頃によく少し余裕が生まれ、周囲を見て自分たちがこれまでの活動の中で何も知れていなかつたことに気づき後悔した。今後は、自分たちの課題ができるだけ早く解決し、より早い段階で視野を広げ、周囲の人々と積極的に関わるよう意識したい。